

## 【浅い川も深く渡れ】

浅い川だからと思って油断をしますと、所によっては深みもあるものですから、ついそういう所にはまって、思いがけない失敗をすることがあるものです。

このように、「物事を軽く見くびって、用心を怠ると、とんでもない失敗をする」ということを警しめた諺です。

川は、見た目には実際よりも浅く見えるものです。だから、深くてもせいぜい膝くらいと思って、それでもズボンを膝よりずっと上までたくし上げて渡ったことが私にもあります。結局ズボンを濡らしてしまいました。

だから、それからというもの、川を渡る時には、いつもこの諺が強く思い出され、どんなに浅い川でも、深い川を渡る用心をして渡ることになっています。

諺というものは譬喩ですから、単に川を渡る際の教訓であるよりも、広く人生一般の教訓として活用するのが本来でありましょう。「油断大敵」という一般的な注意と受け取ることも、「弱敵といえどもあなどらず」という意味に受け取ることも出来ます。

さて、“浅”という字は、旧字体では“淺”となっています。“戈”は武器の一つである“ほこ”の象形です。だから、“伐”という字は、人がほこを取る意味から、“敵をうつ”という意味に使うわけです。

“𠄎”は、そのほこを重ねた形で、“ほこを交える”つまり“戦う”ことを

表わしています(戦という字も戈がその意味を表わしているのです)。戦えば必ずだれか傷つきそこなわれます。それで、“そこなう へる わずか”という意味になります。

“浅”は、“水がへる”“水がわずか”という意味で、水の“あさい”ことを表わしたものです。

“錢”は、“わずかなお金”という意味の字で、戦前、円の百分の一というわずかなお金の単位を表わしたものです。“金銭”という時は、単にお金の意味です。

“賤”は、財政を意味する“貝”とで、財産がわずかしかない、“貧しい”、“身分の低い”ことを表わした字です。“貴”の反対字で、「貴賤を問わず」というように使われます。

“箋”は、“わずかな竹”という意味の字です。紙がまだ発明されなかった時代、本や竹のふだに文字を書きました。これを、札(木のふだ)または“簡(竹のふだ)”と言います。書物は、この札や簡を皮ひもでつなぎ、書物にしました。それで、今でも書物を一巻二巻と呼ぶのです。

“箋”はこの簡の小型なもの、という意味の字で、メモ用に使ったものです。それで、今でも書物より小さな書き物、“便箋”“通信箋”“処方箋”などに使われています。

“餞”は、わずかな食事という意味の字で、送別の宴を送る側が謙遜して“餞”と言ったものです。宴の代わりに贈るお金を“餞別”と言います。